
輝ける王国の物語

zen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝ける王国の物語

【Zコード】

Z04870

【作者名】

zen

【あらすじ】

深い霧に包まれた「霧隠れの森」。

その森をひた走る一人の少年がいた――

サービス終了、移管先未定（涙）の
MMORPG「ブライトキングダム オンライン」の一次小説です。

2012/01/03(火) 追記

移管先の運営会社が決まり、「ハンターキングダム」と名前を変えて、正式サービスが開始されました！

ブログで書いている作品を投稿することにしました。
ゲーム内の用語も多々出てきますが
プレイしていない方にも楽しんでいただけるよう
できるだけフォローしたいと思います^_^

連載小説を書くのは初めてなので
至らない点も多々あります
楽しんでいただければ幸いです^_^

走る少年とエルフの少女（1）

深い霧に包まれた「霧隠れの森」。
その森をひた走る一人の少年がいた。

時折、人間と同じ程の身長がある
二足歩行のネズミのモンスター「ラシトマン」や
人間の子ども程の軀体に、背中に羽を生やした
妖精のようなモンスター「リトルグリンキー」を相手に
剣を振るつている。

木々が鬱蒼と茂った森を抜け、
視界が開けたところで少年は足を止めた。

「もう少しでエルドリンだ」

故郷ルーメンの村長ルメノスから
エルドリンの警備隊長シュティアンに
あるものを渡すよう頼まれていたのだった。

村を一歩出れば、凶悪なモンスターが徘徊する
危険な世界が広がっている。

少年は、将来少しでも村の役に立てるようになると
幼少の頃から剣の修行を積んできた。

そのお陰で、見たことが無かつたモンスターにも
何とか太刀打ちできている。

休憩を終え、さあ進もうかと立ち上がろうとしたとき

背後の茂みから、「何か」が飛び出してきた。

「なんだっ！？」

驚いて振り返ると、弓に矢をつがえた一人の少女とさつきまで自分が相手をしていたラットマンが立っていた。

「やつ！」

少女がつがえた矢を放すと
矢はきらきらと光を放ちながら、
ラットマンに突き刺さった。

どうやらその一撃が致命傷になつたらしい。
ラットマンは仰け反つて地面に倒れ、動かなくなつた。

「だ、大丈夫ですか？」

地面にへたり込んで息を切らしている少女に
少年は声を掛けた。

振り返つた少女の外見は、
深緑色の瞳に亞麻色の髪が腰まで伸びており
顔の両側からは、長く尖つた耳が天に向つて伸びている。

(エルフだ)

村を歩いている冒険者の中に、時折エルフと思われる姿を見かけることはあったが、間近で見るのは初めてだ。

「うん、大丈夫。ありがとう」

少女は飛び跳ねて立ち上がり、
体や服に着いていた泥を手で払った。

どうやら怪我はなさそうだ。

少年は胸を撫で下ろした。

モンスターと戦っていたということは、
このエルフの少女も冒険者だろうか?
どこから来たのだろう?
自分と同じように何か目的があるのだろうか?

様々な疑問が少年の頭に浮かび上がったとき。

「ちょうどよかつた」

少女は少年に向って声を掛けた。

「もし、時間があつたらいいんだけど。
手伝ってくれないかな?」

「えつ?」

いきなり手伝いを頼まれるとは思わなかつた。

「いいんですけど・・・何をすればいいんでしょ?」

「この坂を下つた所にハーブがいっぱい生えてるんだよね~。
集めて来るよつに頼まれたんだけど、数が多いから人手があると
助かるの」

少女はにっこりと微笑んだ。

ルメノスからの依頼に時間の指定はなかつた。

暗くなるまでにエルドリンに着けば問題ないだらう。

「いいですよ」

「わ～ありがと。助かる」

そう言つと少女は、自分が担いでいた鞄を下ろして中から何種類かのハーブを取り出した。

「この黄緑の、セイジってやつと

薬草は葉と根と幹と全部ね」

見本に、と一つづつ渡してくれた。

「あ～、大事なこと言つて忘れてた」

少女は胸の前で手を合わせ、少年に向き直つた。

「あたし、ミトンつていうの。よろしくね」

「僕はパールつていいます。よろしくお願ひしますね」

走る少年とエルフの少女（2）

お互に自己紹介を終えた後、一人はハーブ収集を開始した。この場所にはハーブが群生しているようだ。

見本に手渡してもらったハーブと見比べながら、地面から抜き取ったハーブを鞄に詰めていく。

しばらくして、エルフの少女・ミトンが声を掛けってきた。

「ねえ、パールくんはどうちから来たの？」

「ルーメンって海岸沿いにある村です」

「あ～港があって、大きな船が止まってるんだよね。まだ行つたことないな～」

ルーメンは規模としては小さいながらも港町として有名だ。行つたことは無くても耳に挿んだことはあるだろ？

「ミトンさんは、どちらからいらっしゃったんですか？」

「そんなんに丁寧に言わなくていいよ」

ミトンがくすつと笑う。

「あたしと歳は変わらないと思つし」

「じゃあ何歳なんですか？」

「・・・ナイシヨ」

女性に歳を訊ぐのも失礼だと思ったがエルフが長命であることは有名だ。外見は自分と同年齢に見えても

本来はずっと年上なのだろう。

しかし、気を遣つて話していっては疲れてしまつのは確かだ。
遠慮せずに喋ることにしようと、とパールは思った。

「あとどれぐらいで終わり？」

「ん~セイジがあと十本だね」

ミトンは立ち上がって、背筋を伸ばした。

「ずっとしゃがんでると疲れるね~。」

パールくんも休憩したら?」

そうだな・・・と立ち上がってとした瞬間。

「パールくんっ、うしろー！」

ミトンが驚いた表情でパールの後ろを指した。

振り返るとそこには、今まで何度も倒したラットマンと
同じ様相ではあるが何倍も屈強そうなモンスターが立っていた。

「ガアツ！」

モンスターは声を上げ、手にした斧を
パールに向つて振り下ろした。

「わっ！」

完全な不意打ちを食らつたパールは
体勢を崩して、地面に尻餅をついた。

「早く立つて！」

ミトンはすでに弓矢を構えて迎撃体勢に入っている。

「いくよっ」

打ち放った矢はモンスター目掛けて軌跡を描き、胸の辺りに深々と突き刺さった。

致命傷にはなっていないが、相手の動きを止めたようだ。

「今のうちに！」

パールは慌てて立ち上がり、剣と盾を構えた。

動きが止まっていたのは僅か数秒で、モンスターはミトン目掛けて走り出してきた。攻撃を仕掛けたミトンに照準を定めたらしい。ミトンは次の矢を構えている。

いくら冒険者といっても華奢なエルフだ。

攻撃を受けてしまっては致命傷になる可能性が高い。

(「の子を守らなきやー。）

パールは焦りながらも、ルーメンで自分にファイターとしてのスキルを教えられた、スキルマスター・ルビのアドバイスを思い出した。

（仲間とパーティーを組んでいるときは、まず敵にキックを浴びせて、照準を自分に向かわせる！）

すでにミトンに向つて走り出しているモンスターに対して、パールはキックを放つた。

キックに気をとられたモンスターは、照準をパールに変更したようだ。

自分に向つて走つてくるモンスターを見据えながら、次の手を思い出す。

（少しでもダメージを抑えたいなら、両身を食らわせて敵の動きを止める！）

パールは剣を振るつ前に、思い切り踏み込んで右肩から体当たりを食らわせた。

不意打ちを食らったモンスターは、よろけて仰け反つた。

（最後は集中して、素早く剣を振るつんだ！）

構えた剣を左、右、左と薙ぎ払つ。

ファイターが最初に習得する「トリプルヒット」という技だ。敵の胴体に三太刀、切り刻まれた。

仰け反つていた敵が動き出したかと思った瞬間、また止まつた。モンスターの背中側から、ミトンが応戦してくれているらしい。

パール自身も敵の攻撃を食らいながら

当身と技を何度も繰り返す。

敵から受けた打ち身と切り傷で頭が朦朧としてきた頃。

「やあっー。」

最後に放ったトリプルヒットが予想以上の効果を「えたらしい」。
敵は大きく仰け反って、どう、と地面に倒れこんだ。

「やつたあー！」

ミトンは大きく飛び跳ねて、パールの元に駆け寄った。

「あいつ、強いんだよね～。あたしも何度も追い掛け回されたけど
倒したことなかつたんだよ。パールくん、すごいっ！」

ミトンが無傷であることを確認し、ほっとした途端、
パールは全身からの力が抜けて地面に座り込んでしまった。

「よかつた・・・」

「パールくん、回復ストーンって持ってる?」

あたしポーション切らしてるから、自分で回復してもらわないと・
・・」

よつやく、自分が思った以上にダメージを受けていることに気づいた。

攻撃するのに必死で、攻撃をかわしたり、盾で受けたりする余裕が
ほとんど無かつたのだ。

ミトンが焦っている傍らで、パールはすっかり放心状態になつてい

た。

しばらく休憩していれば、動けるようになるだらうが
今のような敵がいつ襲ってくるとも限らない。

早く移動しなくては・・・とパールは考え始めた。

不意に、暖かな光がパールの体を包み込んだ。

同時に傷はふさがり、打ち身で青く腫れ上がっていた部分は徐々に元の肌の色に戻つていった。

「お~い。そこの少年。大丈夫?」

声がした方を向くと、聖職者と思われる衣装を身に着けた女性と長いローブを身に纏つた男性・ミトンと同じように長い耳をしていることからエルフと思われる・が立つていた。

走る少年とエルフの少女（3）

「はい。大丈夫です」

パールは立ち上がって答えた。

「今のは・・・？」

「うちのお姉さんがヒールをかけてくれたのを」

エルフの男性が氣さくに答えた。

「うめんね。もっと早く助けてあげれたらよかつたんだけど。
今のヒールで勘弁して。ね？」

謝るかのように顔の前で手を合わせ、
パールに向ってウインクした。

「勘弁も何も・・・回復してください、ありがとうございます」

パールは深々と頭を下げた。

「いえいえ。どういたしまして」

「お姉さんは辻ヒールがシコミだからね。お礼なんていらないって」

男性が横で茶々を入れる。

「さつきからお姉さんってねえ。あなたの方が遙かに年上でじょり

！」

女性がメイスで男性を殴る振りをした。

「あ～おつかない。少年も女には気をつけるんだぞ」

急に話を振られて、パールは困ってしまった。
やはり女性に歳の話をするのはよくないらしい。
それはよく分かったのだが。

「少年、さつきの戦いつぱりは立派だつたぞ。
最初は手助けしようと思ったんだがそつちのお嬢ちゃんとの連携も
上手くいっていたからな。見守ることにしたんだ」

エルフの男性はミトンの方を見た。

「ひらも急に話を振られて動搖したらしい。

「パールくんがすぐにタゲ取ってくれたんで助かりました。
あたしも打ち込みやすくなりましたし。
あ、あたしはミトンつていいます。ひらはパールくん」

男性に受け答えしつつ、ミトンが自分を含めて紹介してくれた。

「俺はクラウつていうんだ。よろしくな。ひらのお姉さんは

女性がじりりとクラウを睨む。

「つと、ひらのお嬢さんはニアだ。俺たちはエルドリンから来てたんだけどね」

「依頼も終わつたことだし、街に戻るところだったのよ。そこであなたたちが

戦つているのを見かけて走ってきたの。ラットマンファイターは

結構強いからね

二人とも心配して駆け付けてくれたらしい。

「これからどこに行く予定なのかしら？もしエルドリンに行くのだったら
私たちと一緒に行かない？」

ミリアが尋ねてくれた。

「僕はエルドリンに行く予定です。ミトンは？」

初めてこの子の名前を口にしたな、とパールは思った。

「あたし？あたしはウルガまで戻るよ」
「ウルガ！？」

ミリアとクラウが同時に声を上げた。

走る少年とエルフの少女（4）

「ウルガって……あのウルガかい？」

クラウが半ば呆然として、ミトンに尋ねた。

「ウルガって一つしかないでしようから、そのウルガだと思います」

クラウの質問に、ミトンは一瞬きょとんとした。
そして、答えを続ける。

なぜそんなに驚かれるのか、腑に落ちないよつだ。

「そんな遠い所から、一人で来たの？」

今度はミリアが尋ねる。

「エルドリンまでは、他の冒険者の人たちに連れてきてもらつたんです。

何度か戦闘もありましたけど、ほとんど他の人たちがやつづけてくれてたんで……」

ウルガはエルドリンから「崩壊した監獄」と呼ばれる地域を抜け、さらに谷を渡つた所にある山間の村落だ。

以前は戦争時の基地として使用されていたらしく、
とても強いモンスターが徘徊していると聞く。

まさかそんな場所から来ていたとは。

「それで、どうやって帰るつもりだつたんだ？」

「ここでハーブを摘み終わつたら、帰還書を使って帰るつもりだつ

たんだけど。

「つかりおじこちゃんからもひつての忘れちゃって」

ミートペースト缶を出した。

一同、啞然。

「うへん。俺達もウルガまで送つていけるほど強くねえからな
「そうねえ。帰還書も持つてないから譲つてあげられないしね」

クラウとニアも困つてゐようつた。

「とりあえず、エルドリンまで戻らない?

帰還書が露店売りで出されてるかもしれないし」

「ウルガの帰還書なんて貴重品だろ? そんなにほいほい売つてる訳
な・・・」

クラウの発言は途中で遮られた。

足を押されて飛び跳ねてゐる様子から、
ミリアが思いつきり脛を蹴り上げたらしい。

「何するんだ! この凶暴クレガ!」

「あへら。ケガしたらヒールで治してあげるんだから、問題ないで
しそう?」

女性だけではなくクレリックも怒らせると厄介なかもしれない。
パールは新しい知識を得た気分になつた。

「パールくん、セイジあと10本残つてゐんだけど」

「そうだね。10本集めるまでにはあつちの追いかけっこも終わつ
てるだろうし」

クラウとミコアのじゃれ合いを横田で見ながら
2人はハーブ集めを再開した。

城塞都市エルドリン（一）

4人はエルドリンを目指して霧隠れの森を進んだ。

いつまたモンスターに襲われるかとパールは緊張していたが、
パールやミトンが手を出す暇もなく
クラウとミリアは次々にモンスターを倒していく。

特にクラウの魔法の威力は凄まじく、

数体のモンスターを同時に倒すこともあった。

ミリアはクラウを回復しつつ、
メイスを手にモンスターを殴り倒していく。

「す、う、い！」

ミトンはクラウの魔法の威力に見惚れ、拍手を送っていた。
パールも魔法が放たれるのを傍で見るのは初めてだった。
クラウが杖を構え、呪文らしき言葉を口にすると
光の矢や氷の弾が手から生まれ、モンスター目掛けて放たれる。
次の瞬間には、ほとんどのモンスターが倒れていた。

「魔法って、すごいんですね！」

パールも感嘆の声を漏らす。

「これぐらい、どうしたことないって」

クラウは謙遜しているが、褒められてまんざらでもないようだ。

「僕、メイジさんが魔法使つていろいろを初めて見ました」「やうなのか？」

「メイジさんに限らず、ですけど。

他の冒険者の人たちと一緒に戦うのって初めてだから」

「そうか…じゃあ次はもっとすごいのを見せてやるぞー！」

「あのねえ、この辺りのモンスターなんて

あなたにとつて弱くなっちゃってるんだから。

もうちょっと手加減しなさいよ」

ミコアが注意した。

「いいじゃないか、少しくらい」

「何も考えずに突っ込んじゃって。

少しほはサポートする方のことも考えてよねー。」

そう言われてクラウは少し不機嫌になつたようだ。

しかし、ミコアはサポートする側の負担について苦言を呈していいるのではなく、

単純に、クラウの体を心配しているようだった。

クラウは「メイジは紙だから」と三分の防御力の低さを皮肉つており、

先程の戦闘でもいくらかの傷を負つていた。

自分より弱い相手でも、複数に囲まれては無傷では済まないようだ。

ミコアのサポートがなければ早々に倒れていたかもしねれない。

しばらくして、思い直したようにクラウが言った。

「はいはーい。クレリック様の忠告は有難く頂戴しておきますですよ

「もー、ホントに分かってるのかなあ」

二人のやり取りを聞きながら歩いていると、突然ミトンが声を上げた。

「あつ、エルドリンの門、はっけ～ん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487o/>

輝ける王国の物語

2012年1月5日20時53分発行